

---

**借りは返す！！**

ネルネルネ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

借りは返す！！

### 【Nコード】

N8947K

### 【作者名】

ネルネルネ

### 【あらすじ】

とある主人公と幼馴染の一遍。

(前書き)

即興で書いたものです。

気が向いたら読んで評価してもらえるとうれしいです。

放課後の教室。話もしないクラスメートたちが帰ったあと、僕は一人で自分のいすに座っていた。

なぜ僕は帰らないのだろうと、自問自答の末、理解。

今、両親が離婚の協議中だ。

家に帰って、『祐二、ここに座りなさい』と、拘束されたくない。

もし、両親が別居することになるのなら、僕は父と暮らしたかった。僕は母が嫌いだった。そして、僕が母を嫌う理由がそのまま離婚の原因になった。

血が繋がってはいる。きちんと、父と母から生まれた子供だった。

だが、母は古風な考えなのか少しでも僕が反抗を起こすと暴力を振るう。

逆に、兄にはまったくといって良いほど手を出そうとしない。兄が反抗しても、ある程度穏便に和解するが、僕は殴られて終わる。

それを前々から気にしていた父がついに行動に出たのだが、口論はだんだんと激しくなる一方で。

そして昨日、終に離婚ということの話が滞りなく進みだした。

だから、帰りたくない。僕が原因であってほしくない。逃げて悪いかこの馬鹿。

と。そんなことを頭の中で考えていたら。

「菅野、もう下校時間だぞ。まだ教室にいたのか」

担任の先生が入ってきたのを期に、教室から出て、校門に向かった。

「祐君、遅い」

「真紀ちゃん」

校門の前で、幼馴染の子が赤いランドセルを挟むかたちで門に背を預けていた。

「みんなと遊んでただけど、教室に祐君の姿が見えたから待って

た

「……………そっか」

僕は通り過ぎようとしたが、真紀ちゃんは並んで歩き出した。

「……………」

「……………」

互いに、気まずい雰囲気を感じていたのだろうか。話題が浮き上がっては消え、次第に浮き上がる前に消される。

真紀ちゃんは笑顔のまま隣で歩いてはいるが、なんとなく気づいているのだろう。僕になにかあったことを、僕と顔を合わせた朝に。

「先に行つてて。僕、忘れ物しちゃった」

「じゃあここで待つてる」

先に帰らせようとも、帰ってくれない。

作戦失敗。

とことこ、歩き出す。

「忘れ物は？」

後ろから不思議そうに声をかけてくる。

「忘れてた」

「忘れ物を忘れたの？」

「ジャクネンセイのケンボウシヨウだよ」

「……………？ なにそれ」

「僕もよく知らない」

とことこことこ。

帰り道の半分まで来たとき。

涙が滲み出してきた。家の屋根が見えて、これから起るだろう悲劇に耐えられなかった。

「どしたの？」

「……………なんでもない」

とことこことこ……………、足が止まってしまった。

「どしたの？」

さっきと同じ声色で問いかけられる。

足が震えていて、答えることができなかった。  
見ると、手も震えだした。

僕がとめることができたのは、足と、目から出てくる水滴だけだった。

ずっと、震えていた。どれだけ経っただろうかと、疑問に思うくらい時間の感覚がおかしくなった。

心臓が不定期に脈動しているのが聞こえて、目の前が真っ白になりかけていた。

「祐君」

震えていた手が、物理的に押さえられた。いや、抑えてもらった。暖かかったのを覚えている。

「祐君。泣いていいと思うよ。いつもがんばってるんだから、辛かったら泣くのが子供の仕事だって、知らないおじさんが言ってた」  
知らないおじさんの言葉を真に受けんなよと、言いたかったが。

「……ふえ」

口から漏れ出たのは嗚咽だけだった。

握られていないほうの手で両の目を隠した。あくまで、無意識に。

「……うえ、ひつく」

僕が泣いている間、僕の手を握っている彼女は、反対の手で頭をなでてくれた。

『よくがんばったね。がんばったね』って。

それが、約10年前のこと。

俺が唯一、犯した間違い。

「ゆ〜う〜く〜ん」

あのころと同じ呼び方で、隣の席に座っている女。こいつの前で恥を晒した間違い。

「だめだ」

「まだ何も言っていない」

「先生が後ろ向いている間にカンニングさせろってんだろ」

「……………」  
「だと思った。だいたい、ちゃんと勉強してこないお前が悪いんだろっが」

「……………」

「おい、聞いてるのか」

「お前は今はテスト中だとわかっているのか？ 菅野」

「……………あれ？」

追試決定。しかも二人そろって。

『先生、私はむじつです』

と、黒板の前の担任にすがり付いている幼馴染と一緒に。

「さすが、学校公認のバカップルだな。追試まで一緒に受けるとは先生、バカップル言うな。そもそも付き合ってたねえ。」

それと、俺はテストの答えは埋めていたのだ。それをこいつが無駄にしやがった。

「バカップルだなんて、照れちゃいます」頬を染めてイヤンイヤンと身体をくねらせる馬鹿。

「いや、ほめてない」と先生。

「そもそもカップルじゃねえよ！」これが俺。

ヒューヒューと煽る周りのアホども。

これが、俺が間違えた事の顛末。

あのあと、家に帰っても、離婚は無かった。

母が俺に暴力を振るったことを素直に謝って、それだけだ。

以来、普通の家族と言える。

だから、普通の人生が待っているかと、期待したが。

「ニへへ〜」

この 纏わりついてくる馬鹿に懐かれてしまっただけから、後悔している。

「祐君も隅に置けないよね。こんな可愛い私とカップルだなんて」

「黙れ。死ね」

小学生のころと同じように、隣で帰路を歩く幼馴染。あのころと違って、髪を綺麗に伸ばしているのだが、それでも性格は変わらない。

天真爛漫で、ズカズカと人の境界線をまたいでくる。それを注意したら、『ほえ?』の言葉付きだ。

あの時はそれに不本意ながら助けられたが。別段、心配せずとも、俺の家庭が崩壊することは無かったのに。こいつに助けられてしまった。

「駅前のファミレスだね。おいしそうなパフエが新発売だったんだよ。生クリームの飢えに唐辛子と納豆を万遍まんべんに塗まぶして、さらにその上に生チョコを」

聞いているだけで気分が悪くなるパフエを無視して、家で追試に向けた対策を行いたいのだが。

「じゃあ、それ食いに行くか」

「え!?!」

キラキラ、目が輝いている。瞳の中に星が一杯浮いている感じ。

「あ……でも、お小遣いがそこを突いちゃって」

「奢ってやるよ」

「本当に!?!」

「疑問符が抜けてるぞ」

テストが終わってうとうととしてたら、昔の夢を見て借りを返したくなつたなんて言いたくない。

幸い、バイトの給料が昨日入ったところだ。少しぐらい使っても問題は無い。

「3000だよ?」

「……自分で払え」

「奢ってくれるっていったじゃん」

「若年性の健忘症だ」

中学生になって、初めてこれの漢字の書き方を知った。

「祐君……困ったときはいつでもそれを使うね」

「便利だろう」

「でも、今日は奢るって言ったのを忘れちゃだめな日」

「……………何で？」

「私のおながが鳴っているから」

そんなのいつもじゃねえか。と、呟く。

仕方なく、財布の中身を確認する。野口さんが三枚。丁度吹っ飛ぶ。ポツカーン。野口大破。

財布の中身を確認し終わったのと同時に、

「さ、行こう」

と、手を掴まれる。

全力疾走とまではいかないが、それでも結構の速さで坂を下る。掴まれた手が暖かかったのを、かんじて。

「アリガトナ」

「ん、何？」

「……………なんでもない」

「アリガトナって聞こえたんだけど、何のありがとう？ 助けすぎてどれの事だかわかんない」

「聞こえてたのかよ！ それと、お前に借りを作ったのは一度だけで、それ以外は俺からお前へものばかりだからな！」

これ以上お前に世話を焼かれたくない。だから、借りを返して生きたいんだ。

「で、その一回で何のことなの？」

と、イタズラ心丸出しの笑みを振り返って見せる馬鹿。

「忘れた」

顔をそらす。

「ついさっきまで覚えていたのに？」

「若年性の健忘症だ！」

常套句開放。鉄壁の言葉を張り巡らす。

クスクスと、笑われる。

バタバタと走っていく俺と馬鹿。

借りを返すと言っておいて、引っ張られているのは、何か癪に障る。

「おら、急ぐぞ」

「きゃ」

馬鹿を抜かして先頭に立つ。引っ張っていく俺。

なんか、気分乗ってきた。

おっしや。ずっと言えなかったことを後で言おう。

あの頃から、ずっと、お前のことが………言えるか!!

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8947k/>

---

借りは返す！！

2010年10月28日03時00分発行